

この春、少しずつですが、今までの「日常」が戻ってきました。  
あたりまえのように過ごしていた「日常」が一変してあらためて感じる

何気ない暮らしのなかの大切なコト一。

平成30年7月豪雨災害から間もなく5年経ちます。

「誰かのために、何かをしたい」

これまで被災した人やまちを元気づけようと地域のために活動してきた  
「宇和島NPOセンター」、「もみの木」の足跡とこれからの展望について、  
特集します。

**特集 「これからも共に前へ」**





災害情報共有会議「牛鬼会議」



宇和島NPOセンター設立

## 宇和島NPOセンター スキマに手をさしのべる

宇和島NPOセンターは、災害時に被災者支援でつながったNPO団体同士のメンバーが中心となり活動を始めました。さまざまな団体が災害情報を共有する「牛鬼会議」を開き、会議の中で被災者に必要な支援を届けるためには行政や社会福祉協議会、民間と被災者をつなぐ「中間支援組織」の存在が不可欠であることが分かりました。そして、任意団体として活動する中で、被災地と地域住民のもっと近くで寄り添う支援を目指して法人化されました。

設立時には、窓口機能を持った「Carriage 吉田バンズ」を開所し、今も支援ニーズの収集や困りごと相談の受け付けを行っています。その名前には「Carry（みかんを詰めるキャリア）」にさまざまな情報を詰めて、「age（世代）」を超えてコミュニティの場を作り、必要な団体につなげていく役割を果たすという願いが込められています。

宇和島NPOセンターの活動は、まずみんなに知ってもらおうところからのスタートでした。支援

を必要としている人の情報を聞いて訪問しても支援を遠慮されることもあったそうです。支援の必要な人が「助けて」と声を上げやすいように「宇和島NPOセンター」の名前やその活動をとにかく知ってもらうことが重要だったそうです。そのために、毎日吉田町を巡回し、自治会長に危険な箇所や支援を必要としている人がいないか聞いて回ると同時に、チラシやパンフレット配布も行いました。また、活動内容を多くの人に話し、知ってもらおうことで困りごとが集まりやすい土台づくりをしていきました。設立当初は相談に来る人はほとんどいませんでしたが、こういう地適な広報活動を行うことでふらりと相談に来る人や相談も自然と増えていきました。

「まずはみんなに知ってもらうこと」を通して、発災からしばらく経っても見えなかった情報が集まってきました。流れ込んだ土砂がまだ手つかずのままの倉庫があること、川の中に流され取り残されたままの車があること…。「どこに相談したらよいかわからない」と困っている被災者にスキマから手をさしのべ、行政や社会福祉協議会、民間などと連携し適切な支援につなげていきました。



吉田町 奥白井谷地区の被害



吉田町 白浦地区の被害



茶話会で開催したライフサイクルゲームのようす



高齢者宅への見回りのようす

## 独りじゃない

発災から月日が経つと、土砂撤去などの復旧にかかる支援のニーズは減る一方、災害で生活環境が変化し安心な日常生活が送れない人への生活再建支援の必要性が浮き彫りになってきました。被災した人は独り暮らしの高齢者が多く、近所付き合いも減少してきていることから、地域のコミュニティ形成を促進し、心の復興に注力してきたそうです。そのために、被災した人と地域を結ぶ居場所づくりを行ってきました。

その1つとして「茶話会」があります。まずは地域の人を知ろうという思いからサロンを開催し、最初は4、5人しか集まりませんでした。今は大勢の人が集まるものになりました。参加者に特に決まりはなく、ただおしゃべりをするだけでしたが、そこに集まれば必ず誰かに会って話すことができますという目的で、発災時から月に1回のペースで続けています。最近はハンドメイドや切り絵など、講師を招いて講座も開いています。毎月、茶話会で地域の人と何をしようかとわくわくしながら計画しています。高齢単身者の外出機会としてだけではなく、地域

の人も声がかげやすい場づくりとして、お買い物・お出かけバスツアーを企画したりもしています。

復興がこれからというときに新型コロナウイルス感染症が流行し、外出を控える人も増えて感染防止のため茶話会も中止することがありました。そんな中でも地域のつながりが希薄にならないように、子ども食堂と連携してお弁当を高齢単身者に配布したりもしました。また、食材をもって高齢単身者を訪問することで困りごとや生活状況を確認し、必要に応じて行政や社会福祉協議会につなぎました。複雑・複合化する困りごとに対して地域と多様な機関が一体となって重層的に支援する体制づくりにも関わってきました。さらに、大きなイベントはできなくても、支援を必要としている場所・人へ出向いた活動で足を止めず、できることをして活動を継続してきました。宇和島市の子ども食堂との連携の中でキッチンカーが地域へ出張したときには同行し、子どもたちが遊んでいるときに保護者から困りごとを聞ける場をつくることも大切な役割です。

「独りじゃない」。誰かとながつて少しでも心がホッとする居場所づくりをしてきました。



トレードマークの黄色の服を着て、バイクで吉田町内のお年寄りの見回り活動を続けてきた山口さん





NPO交流会ではお互いの活動内容の紹介、他の団体から支援してほしいことなど活発に意見が交わされた

## つなぐ、協働する

将来の南海トラフ地震などの大災害に備え、「防災」の大切さを広めることも重要な活動です。一度災害を経験した若い世代は、災害が起きても経験を生かしてすぐに避難できますが、高齢単身者は同じようにはいきません。誰もが安全に避難できる逃げ遅れゼロのための防災教育が地域には必要とされています。地域の課題に即した「体験型防災プログラム」事業を市から受託し、地域と協働して防災力の向上に努めています。また、5年前の甚大な被害について、しっかりと次の世代に伝えていくことも大切です。防災減災学習プログラム「ブラ防さんぽ」を展開し、自分たちの住むまちの歴史と災害の爪痕を忘れずに学んでいく活動も行うなど、地域と一体となりながら防災教育の輪を広げていくことを目指しています。

そして、地域のために活動するNPO団体同士をつなぎ、支援し、住民と一緒に住みよいまちづくりをする活動も始まっています。令和5年2月には、「うわじま防災BOX × NPOまつり」を開催し、参加した人には防災を体験してもらう中、NPO団

体の活動紹介の場の提供や各団体の困りごとの聞き取りも実施しました。このイベントはNPO団体がお互いの活動を知るきっかけとなり、その後開催されているNPO交流会へとつながっています。そして、これまで団体それぞれの活動が多かったのが、横のつながりができて活動内容や範囲に広がりも見えてきました。宇和島NPOセンターでは、このような交流の場を増やし、他の団体とのマッチングや地域貢献したい企業などとの連携も視野に入れていきます。

また、ボランティアをしたい人とボランティアを必要としている団体とをつなぐボランティアバンクをつくりました。被災してボランティアに支援してもらい、今度は恩返しをしたいと登録してくれた人もいます。海岸清掃や子ども食堂の手伝い、花壇の整備などたくさんのボランティアの力によって新しい協働へと災害後もつながっています。

宇和島市のさまざまな団体と地域が協働していくことで、これまでの地域課題の解決や新たな課題の気づきにつながっていきます。これからも協働によってみんなが住みやすい宇和島市を目指して活動を続けていきます。

特定非営利活動法人

宇和島NPOセンター

市民や行政、各種団体などに対し情報共有や活動支援を行うことで、地域の課題解決に向けた支援を行っています。また、市内外のNPO団体などと課題を共有しサポートすることで、中間支援組織として互いに助けあう体制を築き、すべての人が住みやすい協働のまちづくりを推進します。

☎ 吉田町東小路甲71 - 1 ☎ 49 - 3563



うわじま防災BOX × NPOまつりのようす



もみの木に集まる飲料水などの支援物資



三間小・中学校前の道路の冠水

## もみの木 自分たちでなんとかしようや

もみの木は、廃園になった三間幼稚園を活用し、住民が主体となった地域の課題を解決する体制やその活動拠点づくりを目指す事業所として、平成29年11月に社会福祉法人宇和島市民共済会が運営を始めました。はじめは、介護予防教室を行ったり、地域の人の存在を知ってもらうため、名前の由来となったシンボルのもみの木をイルミネーションで飾ったりすることから始めました。

豪雨災害が起きたのは、運営開始から半年ほど経過したときでした。三間町でも山あいの集落を中心に多数の土砂崩れや浸水の被害がありました。浄水場の被害により三間町地域のほぼ全体が断水となり、飲み水が使えない状況が2ヶ月続きました。また、どうしても土砂災害被害の大きい吉田町へ支援の手が多くなりました。被害が大きかったのは若い人が少なく、高齢者が多い地区がほとんどです。高齢者など移動のできない人は支援物資を受け取りに行くことが困難であり、夏場で熱中症や脱水症状になる可能性もありまし

た。「吉田のほう被害が大きくなり大変だ。三間のことは自分たちでなんとかしようや」という雰囲気ですぐに生まれ、地域の住民で構成する運営協議会を開き、自分たちでできることを始めていきました。

まずは、もみの木に飲料水・生活用水・食料衛生用品などの支援物資を集めました。そして、「自分のためではなく誰かのために来た人に物資を渡そう」というルールを決め、介護サービスを利用している人にはケアマネージャーが、未利用者へは自治会や地域の人が支援物資を配布しました。もみの木を情報収集拠点として、地域住民・民間事業所とが「行政に頼らない」住民支援を行いました。災害の影響は子どもたちにもありました。発災前、放課後子ども教室は公民館で行われていましたが、発災後の公民館には避難してきた人もいて、町内のいたるところで浸・冠水し騒然としていました。さらに、その翌日には断水が発生し、水が使えないため放課後やその先の夏休みに子どもたちが集まれる場所がなくなってしまうのです。もともと幼稚園だった「もみの木」を使えないかとの話になり、迷うことなく子ども



放課後子ども教室のようす

もたちの居場所として開放することが決まりました。そのため、子どもたちが水を使えるように急いで給水タンクを設置し、トイレの水も配水管理を地域住民が行い、子どもたちもその手伝いをしたり、お礼の手紙を書きました。また、子どもたちが安心して過ごせるように運動場の草刈りをしたり、子どもたちとの接し方について勉強会も開催しました。

子どもたちはオレンジ色の給水タンクを見ると、「水が使えないことのがたさ」と、災害のときに地域の人に支えてもらったことを思い出す」といいます。





子どもたちが走り回って遊ぶホールでは、高齢者の介護予防教室も開かれる

## 地域共生のベース基地

災害により地域の夏祭りが中止となり、少しでも子どもたちの気分転換になるよう「夕涼み会」が開かれ、大勢の地域住民が集まりました。いつしか、高齢者も子どもも障がいのある人も、多世代で交流できる核が出来上がりました。

災害をきっかけにはじまったもみの木の「こども教室」は今もずっと続けています。当初は高齢者の利用が多かったものの、自然と子どもたちのための活動拠点となっていくきました。いつも見守ってくれている地域の人たちに「感謝の気持ちを伝えたい」と、子どもたちがダンスなどの出し物を企画し披露してくれることもあったそうです。

子どもたちだけではなく、地域のさまざまな人が集まる地域交流食堂「もみの木食堂」も開催しました。もみの木に通っている子ども以外にもとにかくたくさんの人に集まってもらい「地域みんなでごはんを食べる」イベントです。当初想定した参加人数を超えるたくさんの方の地域の人が集まり、会場を2つに分けるほどでした。「このまま帰るのが惜しい」と言って

みんながわいわいとおしゃべりをして盛大なものになりました。

また、もみの木には「厨房」がありませんでした。「厨房のないところでは食堂はできない」と諦めるのではなく、「やってみよう」という住民のつぶやきをひろい、どうやったらできるかとみんなで考えました。調理機材を持ち出しての開催は、災害時のための炊き出し訓練のようなものだったといえます。はじめは、機材の設置は男性がやるのがほとんどでしたが、設置の仕方を教わり、女性だけで運営から調理までの全部のことができるようにになりました。これから起こりうる災害時にもきつと役立つと考えます。

たとえ小さな試みであっても地域みんなのために続けていきたいと思います。この夏には新型コロナウイルス感染症の拡大を考慮し、規模を縮小するなどして、久しぶりの「夕涼み会」の開催を考えています。コロナ禍前と同じ規模ではなくても、「無理なく楽しくつながろう」というもみの木のあいことばを胸に、地域共生のベース基地として、交流イベントを続けていきます。



地域交流食堂「もみの木食堂」



地域みんなが集まった夕涼み会



青年海外協力隊の4名の隊員が技能を生かし、地域のために貢献しました



## 輪を広げる

地域で根付いたつながりの力をもっと広げていこうという動きもあります。企業やNPO、NGOなど多様な団体との連携です。

新型コロナウイルス感染症拡大により、青年海外協力隊の隊員が途上国の開発支援のための海外派遣に行けずに国内にとどまる状況がありました。隊員が国内で待機中に技能や貢献意欲を活かせる場所として、もみの木と同じ地域交流拠点の島の保健室（九島）が4名の隊員および訓練生の受け入れを行いました。地域の魅力の再発見、多世代交流事業への参画などが期待され、それぞれが技能を生かし、地域の団体の記録誌の製作などにも尽力しました。三間地域の外から来た目線での隊員活動は、もみの木に関わる住民にとっても大変良い刺激になりました。子ども教室でもたちとも交流し、協力隊の活動を知ることができ、とても良い経験となりました。現在、隊員たちは海外に派遣され活躍しているそうです。また、これを縁に今後再び隊員を受け入れる予定で、温かく歓迎できるように準備をしていきたいそうです。

内閣府と厚労省および電気通信



旧園庭に立つシンボルのもみの木

事業者によるスマホ教室の介護予防効果の実証実験も受け入れられました。これを機にSNSを使いみんなでグループトークを始め、LINEだけでイベントの企画実施が決まることもあるそうです。

さらに地域共生の先進地として注目され、厚労省などからの視察も受け入れられました。また他の廃校を利用した事業の団体とも交流し、津島町の旧浦知小学校を視察しました。

災害を機により強くなった地域共生のつながりの輪は、三間だけにとどまらずどんどん広がりを見せていきます。

社会福祉法人

宇和島市民共済会 もみの木

廃園になった幼稚園を地域交流拠点として、子ども、高齢者、障がい者など多世代の地域住民が活躍できる場をつくり、地域の人たちが暮らしやすい街となるために、住民主体で行うさまざまな取り組みが広がっていくことを目指し活動しています。

☎三間町元宗521-1(旧：三間幼稚園)

☎58-2785



旧幼稚園は再び地域の子どもの集まる場所に



# —平成30年7月豪雨から5年

## 変わったこと、変わらないこと—

### 変わったこと

- ・ 本当にたくさんの人を知ってもらい、地域に根付いた団体になれた
- ・ 災害のときも声を掛け合うことができるくらい地域の交流がさかになった

### 変わらないこと(思う)

- ・ みんなが安心して生活ができるように支える活動をしていきたい
- ・ 事務所が片付かないこと(忙しくて)
- ・ イエローさん(山口さん)の服の色



宇和島NPOセンターの皆さんと代表理事の谷本さん(右端)茶話会で行った「切り絵」が飾られています

### 変わったこと

- ・ 高齢者と子ども、さまざまな世代がふれあう機会が本当に増えた
- ・ 警報が出たら「避難しよう」と声を掛け合い、気遣うのが当たり前になった

### 変わらないこと(思う)

- ・ 「もみの木」とついたら何でもイベントができてしまうこと
- ・ 誰かにつながることでみんながいつまでも住みやすい地域にしていきたい



もみの木運営協議会の皆さんと施設長の家田さん(左端)後ろは豪雨災害時の被害箇所と支援活動マップ

誰かのために何かをしたい

「これからも共に前へ」